

マタイ 21 章 1～11 節「幼子たちの口を通して」

私たちは救い主イエス様のことをどのようにしたら正しく知ることができ、また信じて救いに与ることができるでしょうか。

1. 子ろばに乗って（：1～5）

イエス様はご自身が受ける苦難を弟子たちに予告しながらやって来て、エルサレムの近くのオリーブ山のふもとのベテパゲという所に着きました。そこからイエス様は二人の弟子を使いに出し、近くの村から子ろばを連れてくるように言われました。2～3 節。

イエス様はこの子ろばのことをどうして分かっていたのでしょうか。その村に行くと子ろばがつながれていること、誰かが何かを言っても、「主がお入り用なのです」と言えば、すぐに渡してくれるという神の導きを、すべて主イエス様はご存知だったのです。

5 節に引用されているのはイザヤ書 62 章 11 節とゼカリヤ書 9：9 です。主イエス様はご自身の歩みは、旧約聖書であらかじめ表されていたことや預言されていたことを成就するものであることを承知しておられました。そして、その頂点となるのが十字架と復活であることもご存知で、エルサレムに向かって行かれたのです。

5 節。イスラエルの理想の王であったダビデの子孫から王が立ち上がり、ローマの支配からユダヤを解放してくれることを民衆は待ち望んでいました。しかし、そのような人々の期待とは違う王として、イエス様はエルサレムに入られます。

「主がお入り用なのです」の「主」とは、主権者、神の権威を持つ方という意味で、イエス様はご自身のことを神によって遣わされた「主」とであると主張されたのです。

そのような方がエルサレムに入られる時に、子ろばに乗って入るのです。この世の国の王とは違います。驚くほどへりくだった姿で、「柔和な方」として来られます。それは、軍事力や権力によって国を建てるのではなく、愛と自己犠牲によって神のみこころを実現するメシア、救い主にふさわしい姿です。本来イエス様は主であるお方、この世に対して主権を持っておられる方であり、神の国の王であるお方です。しかし、ご自身が言われたように、「仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来た」のです。

2. 群衆の歓迎（：6～11）

過越の祭りを迎えようとしているエルサレムには、各地からユダヤ人たちが集まって来ていました。出エジプトを記念する過越の祭りですから、メシアに対する民衆の期待は高まります。そこに噂のイエス様がエルサレムに入って来られるということで、いやが上でも群衆は興奮しました。多くの群衆が迎え、イエス様の前と後ろを進み、皆が叫んでいました。9 節後半。

これは詩篇 118 篇のみことばを基にしていることばです。イスラエルの祭りの時には、このような詩篇を人々が交互に唱えたそうです。「ホサナ」とは「私たちに救ってください」という意味ですが、転じて賛美の叫びの定型句となりました。また、「ダビデの子」とは、ダビデの子孫として、ダビデのような王として、ユダヤを治めてくださるメシアへの期待が込められています。「主の御名によって来られる方」とのことばにも、神、主によって遣わされる救い主への期待が込められています。「いと高き所に」と神を賛美しています。

群衆はイエス様こそこの詩篇で歌われているメシア、救い主ではないかと期待し、喜んで迎えたのです。

しかし、群衆はメシアについて正しく理解していませんでした。期待や不安が入り混じって、「この人はだれなのか」という話になり、「ガリラヤのナザレから出た預言者イエスだ」と人々は語っていたということです。

群衆が期待していたのは、旧約聖書に書かれている預言者エリヤやエリシャのように、神の不思議な力強い御業が行われて、ユダヤの国がローマの支配から解放されることだったようです。この時「ホサナ」と賛美しながらイエス様を迎えた群衆が、数日後には、イエス様が自分たちの期待とは違ったことが分かると、指導者たちに扇動され、「十字架につける」と叫ぶことになるのです。

この週のうちにイエス様は人々に捨てられ、十字架にかけられます。しかし、主イエス様の十字架こそすべ

ての人の救いの道です。私たちは聖書から教えられています。イエス様は十字架で死なれ、三日目によみがえり、天に昇られました。王の王、主の主として天の御座に座して、すべてを支配しておられます。そして、悔い改めて救い主イエス様を信じる人は誰でも、罪から救われ、神の民とされます。主に従い、主に守られ、導かれて生きることができます。主イエス様が言われたように、「神の国はあなたがたのただ中にあるのです」。クリスチャンたちの生き方と証によって、目に見えない神の国が表され、広げられていきます。やがて、キリストが再臨され、神の国が完成する時には、クリスチャンたちは永遠の天の御国に入り、神、主とともに住まうことができます。イエス・キリストはそのような神の国の王であるお方なのです。

3. 神の国の王に対して

その神の国の王であるお方に対して、私たちはどのようなべきでしょうか。この箇所から教えられることを二つ挙げたいと思います。一つは、聖書から学び、正しく知って、信じることです。

群衆はイエス様を救い主ではないかと期待して、喜んで迎えました。けれども、自分たちなりのメシア理解に基づいて、そのような救い主を求めていました。

イエス様がお話しになった「種まきのたとえ」の「岩地」のことを思い起こします。たとえを説明してイエス様は言われました。「岩地に蒔かれたものとは、みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れる人のことです。しかし自分の中に根がなく、しばらく続くだけで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまづいてしまいます」(マタイ 13:20~21)。

そのような人々の特徴は根がないことです。根のない信仰であっても、しばらくは続きます。けれども、信仰のゆえの問題、何か困難や迫害が起こると喜びはすっかり消えてしまい、残念ながら教会から離れてしまう人もいます。

根をしっかりと下ろした信仰生活のためにはどうしたら良いでしょうか。まず、聖書から学ぶことが必要です。信仰は自己流ではいけないのです。神が教えてくださる真理を、その通りに受け入れなければなりません。聖書からよく学び、正しく知って、信じることがとても大切です。

もう一つのことは、矛盾するように思えるかもしれませんが、子どものように素直に受け入れるということです。

15~16節。子どもたちが、イエス様を迎えた時に群衆が叫んだ「ダビデの子にホサナ」ということばを繰り返し叫んでいました。それを見た指導者たちは腹を立て、イエス様に問い詰めます。それに対してイエス様は詩篇8篇のみことばを引用して、幼子たち、取るに足らない者と思われているような者たちの口を通して、神、主はご自身の誉れを表し、その賛美を受け入れられると言われました。

指導者たちのように旧約聖書についての知識がなく、様々な経験がないとしても、素直にみことばを受け入れる者によって神は賛美を受けられるということです。いやむしろ、指導者たちには分からない霊的な真理を幼子たちが受け止めることができるということです。11章25節。

ですから、みことばによって正しく知ることは大事なのですが、たとえ聖書やキリスト教についての知識なくても、神が真理を教えてください。 「ダビデの子にホサナ」、救い主イエス様、どうかお救いくださいと叫ぶなら、主は応えてくださいます。素直に救い主イエス様を信じて心に受け入れるなら誰でも救われるのです。そして、救い主イエス様を賛美することができるのです。

イエス様は子ろばに乗ってエルサレムに入られました。預言を成就し、救いを成し遂げるために、十字架に向かって行かれました。神の国の王であるお方ですが、柔和な方で、私たちの救いのためにご自分のいのちを与えて仕えてくださいました。そのイエス様によって罪から救ってくださる神の恵みをぜひ知っていただきたいと思いますし、信じていただきたいのです。みことばを聞き続け、正しく知っていただきたい。根を下ろした信仰を持っていただきたいのです。そして同時に、まだ知識が十分ではなくても、救い主イエス様に救いを求めるなら救われます。心を開いてイエス様を受け入れていただきたいのです。信じて救われるなら、さらに神の恵みとまことを知ることができるようになります。そして、主を賛美して生きることができるのです。神に祈り、イエス様を信じる決心を言い表していただきたいのです。